

# 2008年北京オリンピック大会の関連事業と ガバナンス・プロセス

## —執行現場における観察から—

中 村 祐 司

### I. 北京五輪事業の現場からの考察

2008年北京オリンピック大会（北京五輪）の開催は、中国にとって、スポーツ領域における国力の誇示にとどまらず、政治・経済・産業・文化などの体制、制度・システム、政策、法規、さらには社会や国民生活のあり方など、いわば国家の総合力が国際的に問われると同時に、中国という国家そのものが世界に誇示された大規模事業であった。

北京五輪をめぐる評価については、肯定的・否定的な多くの見解が提示し尽くされた感がある。また、いわゆる経験談などエッセーとしての記述も存在する。しかし、北京五輪関連の諸事業が適用される実際の現場に身を置いて、これを社会科学的研究に従事する者の立場から考察した記述はほとんど見られないように思われる。

そこで、以下、北京五輪の関連事業が展開された現場での経験の紹介を行い、たとえ定点的・一時的な観察にとどまったという制約があっても、こうした諸経験とこれまでの新聞報道等における評論とを踏まえて、ガバナンス・プロセス（統治過程あるいは協治過程）についての特徴を総括的見解として指摘することとする。

具体的には北京五輪開催年とその前後の年（2007年から2009年まで）における夏季期間（7月と8月）のうち、3週間から4週間程度、中国（天津市および北京市）に滞在した経験をもとに、主として北京市において五輪関連事業が社会生活領域にどのような影響を及ぼしているのかを観察したものである。

### II. 広範囲に及ぶ準備事業

2007年夏季（7、8月の40日間程度）に天津市を拠点に滞在し、北京五輪開催1年前の準備状況を把握しようとした。まず、研究趣意書<sup>1</sup>を作成

した上で、JAICA（国際協力機構）中華人民共和国事務所の調査機会設定の仲介協力を得て、現地調査活動がスタートした。最初に参加した北京五輪関連事業が、中華全国青年連合会（全青連）<sup>2</sup>主催により秦皇島で開催された、中韓高校生（韓国水原から25名、地元秦皇島から20名、その他20名程度）による自転車走行会・サッカー試合（7月28日、29日）であった<sup>3</sup>。スポーツ総合宿泊施設やオリンピック記念公園の整備、10kmの自転車走行時の道路規制の徹底、記念行事における華やかなポスターや鳩の一斉放出など、当時、1年後に控えた北京五輪開催に向け、中国政府が五輪歓迎ムードや人々の関心を高めると同時に、近隣国との友好関係の一層の醸成に努めようとする政策的な意図を直接認識できた。

天津日本人会<sup>4</sup>における聞き取り（07年8月6日）において、北京五輪の時期にはホテルなどの宿泊施設に不足が生じると予想され、北京市からのアクセスの良い天津市内のホテルも宿泊需要を当て込んでいることが分かった。

インターネット情報をもとに、市内にあるオリンピックサッカースタジアムの広場で開催された「北京五輪1年前のカウントダウン・フェスティバル」(Four Seasons Fantasy" Football Match to Celebrate the Olympic Games one-year Countdown. Office of the Olympic Competition in Tianjin, Tianjin Olympic Center Stadium)（同年8月6日）に入場しようとしたものの、関係者以外は中に入れず、200-300人離れたところからステージを遠くに見ることができた程度であった。北京五輪関連の行事への参加者は関係者のみに限定されたのである。

また、同年8月8日、JAICAによる紹介とスタッフによる通訳の助けを借り、中日友好病院<sup>5</sup>においてインタビューを実施した（07年8月8日）。そ

の要旨以下のとおりである。

中日友好病院では、とくに医療チーム（リーダー 2 名、医師 42 名、看護婦 42 名）を「鳥の巣」に派遣する。五輪開幕から閉幕までの期間に常時駐在する。病院は交通アクセスが良く、1998 年以降、累計で 180 万人の患者を診てきた。医師 600 人、看護師 1,000 人の合計 1,600 人である。看護師は附属の看護師学校で英語や日本語などを学ぶしくみが確立されている。病院の国際医療部は 2000 年の国内調査で満足度トップとなった。2001 年の IOC（国際オリンピック委員会）の視察では 100 点満点の評価を得た。

北京五輪関係者への救急処置や怪我の治療、入院措置など、指定病院として選手・審判・指導者（コーチ）に対応している（ちなみに、IOC 幹部対応は協和病院、メディア関係者対応は安貞病院）。専用の窓口を置き、31 のベット（予備としてさらに 33 ベットを追加）を用意しており、サイズもたとえば大柄なバスケットボール選手から小柄なウエイトリフティング選手などに対応できる。入院にあたっては、たとえば 8 種類の食事を用意しており、中国食も日本食もある。入院者と病院スタッフとのコミュニケーションは英語が中心となるが、いわゆる「言葉の壁」は存在しないと考えている。病院スタッフは五輪に関する規則などの勉強を行い、国際基準の礼儀やマナーを守り、ひいては相互コミュニケーションの過程で中国の歴史・文化の紹介も行っていきたい。このように北京五輪を 1 年後に控えてボランティアな貢献に力を入れていくのが中日友好病院の特徴である。

### Ⅲ. 競技場の建設状況とプレ五輪事業

同日午後にはタクシーをチャーターし、市内の北京五輪競技施設<sup>6</sup>の建設状況を可能な限り見て回った。射撃場や大学施設などの一部の競技施設は回れなかったものの、全体を通じて既存施設にせよ新規施設にせよ、工事の槌音が至るところで響いていたということと、周囲に柵を設けて進入を許さない警備の強固さ、さらには鳥の巣など主要競技施設の建設現場には、多くの民工（農村出身の労働者）の姿が目立った。

全青連主催の「中日韓青少年友好会議」

（China, Japan and ROK Youngsters Friendship Meeting. 8 月 16 日から 22 日まで。日本人青年の参加者数は約 80 名）における五輪プレ大会応援事業に参加する機会を得て、五棵松球場で野球の試合（2007 International Baseball Tournament）を視察した（07 年 8 月 19 日）。運営は 1 年後の本大会の予行練習であり、チケットの販売、セキュリティ検査、マスコットによる出迎え、応援のやり方、球場内国営企業ブースの設置、球場ボランティアの配備など本番さながらであった。球場の入場者数を当初に設定した数に厳しく制限され、チケット販売時間枠外での購入はできないように見受けられた。また、翌 20 日は天津経済特別開発区（TEAD）の濱海地区にある本格的な半ドーム型のサッカー競技場での交流試合を各国のメンバーが参加する形で行った。天津市では市内の大勢の大学生の出迎えもあった。

このように北京五輪の PR 事業として全青連による青年交流事業が組み込まれ、大会運営におけるボランティア貢献の試行活動が展開された。これらは北京五輪関連の波及事業の一つと見ることができる。

同年 11 月に開催された「第 3 回アジアスポーツ法学会」<sup>7</sup>に参加・報告の機会を得た。分科会の際に韓国人研究者の韓国語による発表を中国語訳するという局面があった。両言語とも理解できずに途方にくれていると、北京五輪組織委員会の若手スタッフが声を掛けてくれ、中国語をその場で英語に直してくれるという経験をした。来賓や参加者には国家体育総局や北京オリンピック組織委員会の関係者の姿も目立った。学会の場にも中国政府関係者のオリンピック成功に向けた熱い思いが浸透しているかのようであった。

JICA の紹介により、北京郊外の中国障害者スポーツトレーニングセンターにおいて開催された「車いすバスケットボール東アジア交流大会」（WAFCA East Asian Wheelchair Basketball Friendship Game）<sup>8</sup>を視察する機会を得た。参加は中国 2 チーム、台湾、韓国、日本が各 1 チームで、観客席から見た韓国－中国戦、中国－日本戦の競技レベルは素人目にも極めて高く、真剣勝負が繰り広げられた。翌年のパラリンピックを見据えて、警備や応援などが模擬パラリンピックと

して位置づけられていた。競技施設も広大な土地に陸上、自転車、アーチェリー、水泳、サッカーなどの競技場以外にも、試合会場となった総合トレーニング場や筋力トレーニング場、盲人球技場、宿泊棟、管理棟が整備されつつあり、大規模な施設整備の現場を目の当たりにした（07年11月11日）。

#### Ⅳ. 基盤・「下支え」事業としてのボランティア活動

メインスタジアムである通称「鳥の巣」の周囲には、大勢の観光客が一目見ようと押しかけていた。国家水泳センター（通称水立方）周辺についても同様な光景であった（08年7月26日）。

北京市計画展覧会（Beijing Urban Planning Exhibition Centre）で開催の2010年冬季オリンピック大会開催地のカナダ・バンクーバーのPR展を見た。北京訪問の観光客にバンクーバー大会とカナダへの関心をもってもらおうという企画であった。ボランティアには英語・中国語・日本語に堪能な中国人のカナダの大学生がいた（08年7月31日）。

同年7月30日に北京において、日本の五輪スポンサー企業（電化製品企業）が、CBD（Central Business District）にある百貨店の一角に最先端の電子媒体を駆使した北京五輪PRと自社製品の展示を行っていた。スタッフとのインタビューにおいて、2016年まで五輪スポンサー権利を持っているこの企業には、夏季冬季と2年毎に五輪があり、日本には専門のオリンピック担当の部署を置いていること、また、北京五輪に関して他のスポンサー企業同士での連絡を取り合っていることが明らかとなった。ここからも北京五輪運営の一翼を担うスポンサー企業の基本的スタンスが窺われる。

全青連スタッフとのインタビュー（08年8月5日）において、好評であった前年の中日青少年交流事業が3カ国相会議で取り上げられ、08年は9月17日から23日まで日本でされることになったと聞いた。五輪大会への全青連の協力活動について、全青連加盟の中国青年ボランティア協会があり、また、北京市青年連合会が北京市民40万人の五輪ボランティアと海外からの五輪ボラン

ティアを統括している。中国内各地からは合計で10万人の五輪ボランティアがやってくる。各省から100名の代表ボランティアが合計30省からやってくるので、3,000名が代表で北京に来る。その関係で、全青連からも各省から1名ボランティアを派遣している。浙江省からの派遣者が昨年秦皇島の中韓高校生による自転車走行会・サッカー試合で中心として活動したスタッフであり、北京五輪では、自転車競技（トラック）のボランティア統括を担当している、との話であった。

全青連のスタッフによれば、北京五輪の影響を肌で感じるのが、「ここ3、4年で青年交流の量が増えてきた」ことである。インフラ整備に関して、確かに北京に間に合うように作ったが、終わった後もますます建設整備は進んでいくように思われる。上海との都市間競争はもちろんあるが、北京市も発展するし、上海市も発展するし、中国も発展するという考えを持っている、というものであった。

このように全青連の活動が五輪大会ボランティア活動と連結している状況が明らかになった。全青連は大会運営を支える青年層とリンクしているのである。

JAICAスタッフとのインタビュー（08年8月5日）においても、以下のような点が指摘された。すなわち、ボランティア活動について、北京市内での条件として2カ月間は毎日8時間確保というのがあり、勤め人は無理なので結果として学生ボランティアが多い。一方で企業からのボランティア派遣者もいる。小中学校の教員の場合、少なくとも1日は義務としてボランティアに費やさなければならない、といった指摘がそれであった。北京五輪におけるボランティア活動はまさに基盤事業であり「下支え」事業なのである。

#### Ⅴ. 全方位「規制」の展開

一方で、「北京五輪期間中は北京の他の行政サービスが麻痺する側面」がある。また、道路のオリンピックレーンを走ると罰金200元だったが、それでも違反者が絶えないので点数削減を「－（マイナス）6」とした。これは、2回違反すると免許取り消しとなる減点で、そうなる最初から全て取得し直さなければならない重い処罰である、

と JAICA スタッフから聞いた。このように北京五輪開催には種々の規制が入り込まざるを得ないのが分かる。

在中国日本大使館作成の資料「北京オリンピックの際の各種規制措置（報道振りとりまとめ）」（2008年7月17日現在。表1参照）によれば、たとえば「大規模会議の開催」については、「8月1日から9月23日までの期間中、オリンピックと関係のない全国的・国際的な会議やイベントの開催の禁止」が北京市人民政府の通知として前

年8月に出された。

なお、スポンサー企業が提示する五輪宣伝イベントとして実際に目にしたのは、たとえばコカコーラが「世界天階」(The Place)において巨大天井スクリーンを活用する形でのイベントであった(08年8月7日)。その際のセキュリティチェックは非常に厳しく、飲料水の携帯が一切認められなかった。

表1 北京五輪大会をめぐる規制一覧

(2008年7月17日現在)

規制分野	規制内容
<b>1. 出入国管理規制</b>	
① 日本国民の一般旅券に対する査証免除	変更なし
② 中国への持ち込み・中国からの持ち出し品に関する規制	変更なし
③ 旅券所持に関する取り締まりの強化	変更なし（「外国人入境出境管理法」及び同実施規則に基づく）
<b>2. 交通規制</b>	
① 車両の通行規制	a) 7月20日から9月20日まで、北京市内で車両のナンバープレートの末尾が奇数か偶数かによる規制を実施 b) 7月20日から9月20日まで、貨物輸送車両は六環路内の道路の通行禁止 c) 7月20日から9月20日まで、北京市内ナンバーの猛毒化学品輸送車両・土砂輸送車両は北京市内の進行禁止（他省ナンバーの危険化学品輸送車両の北京市への乗り入れは、7月1日から9月20日まで禁止）
② 悪天候時の交通規制	オリンピック期間中に増水や深い霧が発生した場合には、各料金所は直ちに道路を封鎖
③ オリンピックレーン	7月20日から9月20日まで、北京市内の道路にオリンピック専用レーンを設け、同レーンの通行権を持つ自動車を除き、その他の車両及び歩行者の通行を禁止する。
④ 自動車事故発生時の対応	軽微な交通事故の場合には、速やかに現場を立ち去り、道路を混雑させないようにしなければならない。
<b>3. 環境汚染対策規制</b>	
① 対自動車規制	7月1日から9月20日までに北京市に乗り入れる他省ナンバーの自動車は、規定の排出基準を満たしていなければならない。
② 工事現場	各工事業者に対し、7月20日前に土木工事作業等を停止
③ 汚染企業の操業停止	排出基準を安定的に達成できない企業は操業停止処分。北京市のセメント加工所等は原則として生産を一時停止
④ 有機排気ガスの排出削減	ガソリンスタンド、露天の吹きつけ、印刷、家具生産など有機排気ガスを基準以上に排出する工場は生産停止

⑤ 極端な気象条件の下での措置	無風状態など汚染物資が拡散しない極端な気象条件が生じた場合には、応急の措置を執る。
<b>4. 宿舎・ホテル関連規制</b>	
① 夜間の野宿について	変更なし（飛行場、駅、歩道などの公共の場所における野宿の禁止）
② 宿泊時の登録など	変更なし
<b>5. セキュリティ関連規制</b>	
① 空港の離発着への規制	2008年8月8日19:00～24:00の間、北京空港への離発着の禁止
② 空港への立ち入り	7月20日より、北京や上海など20の空港において、搭乗客や出迎え者を含め、空港への立ち入りに安全検査を受けることが必要
③ 地下鉄乗客への安全検査	大きな荷物を持っている乗客に対して、各地下鉄駅で手荷物検査を実施
④ 北京上空への飛行物体の活動の制限	オリンピック及びパラリンピック開催のために特別な必要がある場合を除き、7月20日から9月25日まで、北京市内において、小型飛行機及びその他の飛行器具による飛行活動、アドバルーンなどによる広告などを行うことを禁止
⑤ 北京市に乗り入れる長距離バスの乗客への規制	河北省、天津市、内モンゴル自治区などの地方から長距離バスに乗って北京市に来る乗客に対して、身分証の検査または実名の登録を要求
⑥ 混雑の予想される場所への規制	オリンピック期間中、朝陽区ではデパートなどの人の流れが密集する場所には人数制限を設定する予定
<b>6. 観戦関連規制</b>	
① 観戦時の規制	以下の行為を禁止 a) 銃器や爆発物、放射性物質等の中国の法令で規制されている物品の他、太鼓・ラッパ等各種楽器、オリンピックに非参加の国または地域の旗を持ち込むこと b) 競技場内において、許可を受けずに商業、宗教、政治、軍事、領土、人権、環境保護、動物愛護などの内容に関する宣伝、普及、展示などの活動を行うこと c) 審判員、選手その他のスタッフを包囲・攻撃すること、デモ行進や座り込みなどの行為を行うこと
② オリンピック競技場へ持ち込み規制	a) 持ち込み品の規制 b) 競技場には手荷物預かり所を設けず、持ち込めない手荷物は現場で要廃棄
③ スローガンや横断幕に関する規制	スポーツイベント会場において、侮辱的なスローガンや横断幕を掲げたり、オリンピック会場において宗教・政治・民族などに関するスローガンや横断幕を掲げることを禁止
④ 国旗などへの侮辱	公共の場において国旗などを燃やしたり、損壊することは刑事責任を追求される。
<b>7. その他の規制</b>	
① 大規模会議の開催	9月1日から9月23日までの期間中、オリンピックと関係のない全国的・国際的な会議やイベントの開催の禁止。4月30日から7月31日まで、オリンピックと関係のない全国的・国際的なイベントを厳格に規制
② 郵便物への規制	電気製品を郵便で発送することを制限
③ 広告への規制	北京市内の空港、駅、主要道路及びオリンピック競技会場周辺等を含む主要地区における広告は、主に開催都市やオリンピック大会、オリンピックスポンサー企業の宣伝に限る。

資料：在中国日本大使館「北京オリンピックの際の各種規制措置（報道とりまとめ）」より「備考」を除き抜粋。

## Ⅵ. 北京市民の歩行、地下鉄利用、ボランティア活動の状況

北京五輪の開幕日である同年8月8日、「JAICA 中国事務所ニュース」に掲載される依頼原稿を作成した。この時点で北京市滞在2週間が経過しており、とくに印象に残った街の様子とボランティアについて「オリンピック期間中の北京に滞在して」と題して執筆した<sup>9</sup>。その内容は以下のとおりである。

「今、世界から最も注目され、最もダイナミックな変化を見せているといっても過言でない北京にオリンピック開催期間を含め、1カ月ほど身を置く機会に恵まれた。その中で最も印象に残ったことを二つ挙げたい。

一つは、街を歩く人々の様子についてである。『せかせかした感じがなく、ゆっくり堂々と歩いているなあ』というものだった。とくに道路を渡る際には急がずに、誰もが前後左右の状況を冷静に把握した上で、巧みに車をすり抜けるように横断していた。

車は右側通行、赤信号で右折 OK なため、歩行者にとって信号が青でも左側からやって来る車を優先させるケースが多い。そして横断歩道の半ばあたりで対向車が右折してくれば、車のスピードや車との距離を瞬時に捉え、そのまま歩き続ける場合もあれば、立ち止まって車をやり過ごす場合もある。

しかし急がず慌てない。あくまでも自然体なのである。まるで北京市民は誰もがこうした巧みな『技(わざ)』を自然に身に付けているかのようだった。車は止まってくれるという歩行者優先の日本での感覚をそのまま持ち込んで、時にヒヤリとさせられた。北京市街で道路を渡るという行為がこれほど難しいとは思わなかった。

もう一つは北京オリンピック開催との関連で、街中の至る所でユニフォーム姿のボランティアが目立ったことである。大学生などの若者が多かったようであるが、「志願者」という腕章を付けた高齢の方々もがんばっていた。大きなホテル・ビルの出入り口、駐車場付近、バス停、地下鉄の改札口・ホームなどでよく見かけた。ボランティア・ブースを設けているところも随所に見られた。

新設の地下鉄駅で交通 IC カードに加金しよう

とした際、窓口の職員との英語でのやり取りがうまくいかず、職員が救いを求めるようにボランティアの学生を呼んで、その学生が英語を中国語へ通訳してくれ、希望した額の加金を行うことができた。また、地下鉄からバスへの乗り換え、観光施設の開館について高校生風のボランティアが英語で一生懸命説明してくれた。滞在中、何かあった時にはいつでも助けてくれると思わせる安心感をボランティアは与えて続けてくれた。

ボランティア行為はユニフォームを着た人たちだけではなく、タクシーに乗車中、急な予定変更で最寄りの地下鉄駅で下車した際、それまで余裕の表情だった運転手は、突如必死に英語での会話に応じてくれた。地下鉄の車内で私が持っていた重いバックを膝の上に置くよう促してくれた年配者、そして小さな子どもや高齢者に席を譲る若者の姿も見られた。

残念ながら、こうした草の根ボランティア活動が、徹底したテロ対策のセキュリティチェックによって減じられてしまったことは否定できない事実であろう。しかし同時に、オリンピックはボトムアップ型の献身的行為が北京の人々の多くに浸透する重要な契機になったのではないだろうか」

## Ⅶ. 諸事業の浸透と継続

北京五輪参加選手の応援と 2016 年大会の東京招致運動の一環として、JOC（日本オリンピック委員会）が北京市内のホテルに開設した「ジャパンハウス」を訪問した（08 年 8 月 10 日）。間接的にせよ、こうした応援・招致空間の創出を可能としたのが、北京五輪であった点に留意しておきたい。また、「前海」南側のボランティア・ブースを訪れ、ボランティアに参加している学校教員から話を聞いた。たとえ小さな貢献ではあっても、北京五輪ボランティアに参加できる喜びは大きいとのことであった（08 年 8 月 12 日）。隣接して次回 2012 年大会を PR する「ロンドン・ハウス」が開設されていた。

そして、北京展覧会で開催の「第 1 回五輪博覧会・北京 2008 年五輪博覧会」（8 月 8 日から 10 日間開催）を見る機会を得た（08 年 8 月 16 日）。IOC、北京五輪組織委員会、中国五輪組織委員会、中国邮政グループの共同主催で、五輪事業として

は初めての博覧会である。国際五輪切手展や国際個人五輪記念品収蔵展、これまでの五輪大会のトロフィーの展示など、多彩な内容の企画展であり、大勢の人々が訪れていた。

こうした一連の周辺事業から、北京五輪は今後の他の五輪大会を宣伝する格好の機会を提供していることを知った。

実際の五輪競技の観戦では、女子ソフトボール（8月18日の日本対カナダ戦とオーストラリア対ベネズエラ戦）と野球（翌19日の台湾対アメリカ戦）がある。前者の羊台球場へのアクセスについては当初は北京五輪組織委員会提示の地下鉄「公主攻」駅下車、そこからのシャトルバス利用を考えたが、当駅からバス停まで1.5kmもの距離があることが判明し、実際には利用できない状況と判断せざるを得なかった。後者の五棵松球技場の場合、それとは対象的に開通した同名の駅近くで、大量の人々をさばく動線もスムーズであった。

五輪開催1年後の北京市の状況について、鳥の巣、水立方、国家体育場の中が入場料徴収とセキュリティチェックを経た上で、一般に開放されていた。前2者には中国国内各地から大勢の人々が訪れていた。五輪終了後の競技場の管理運営は大きな課題とされていたが、観光客から徴収する入場料や鳥の巣や水立方内で販売する記念グッズなど、したたかと思わせる経営が展開されていると感じた（09年8月2日）。

その他にも、07年と08年における夏季の北京滞在では、観光地など至るところで北京五輪のオブジェや写真等を目にした。09年においても、たとえば万里の長城（八達嶺長城）の山腹に大きく「同一夢、同一世界」（One World, One Dream）という巨大な看板が設置されていた（09年8月4日）。09年夏の段階では、地下鉄のセキュリティチェックは継続しており、また、北京空港でのチェックも徹底していた。また、入国・出国手続きの際には、係員の対応を空港利用客が3段階で評価するボタン式の電子装置も設置されていた。

## VIII. 「交錯・連結・合成」のガバナンス変容に向けて

2007年から2009年の夏季における北京市滞在中では、ボランティア活動の状況を直接目にし、人々の中での盛り上がりを感じた。また、中国における北京五輪のトップスポンサー企業の事業にも触れ、五輪試合観戦や寄稿掲載の機会も得た。行政・政策の研究者として、都市行政・政策研究の視点からも、巨大かつ変貌著しい北京市や天津市に直接身を置けたことは貴重な経験であった。

実際の経験から、中国ではとくに権力機構メカニズムの流れに乗るといえるのか、その中にいったん入り込むことができると、北京五輪をめぐるいろいろな果実が得られるが、そうでないと強烈にはじき出されるという認識を持った。また、政府の手足となって献身的にボランティア活動に従事することが、一例を挙げれば、エリート学生のような様相を呈しているし、将来の重要なワンステップとなることは否定できないであろう。さらに、北京五輪運営は、そのまま中国の国家運営の力量を体現した様相を呈したがゆえに、強力な規制措置が採用されたという言い方もできるであろう。

北京五輪前後1年を含む定点的な観察の経験と、この間の新聞報道やインターネット上の評論から見出されるところの、現状認識としての北京五輪をめぐるガバナンス・プロセスの特徴は以下のように総括できると思われる。

まず、北京五輪をめぐるガバナンスの中心・基軸に位置するのが中国政府である。あくまでも中国政府がガバナンスの中心軸に位置する。

垂直ガバナンスにはトップダウン型（下降型）とボトムアップ型（上昇型）があるが、より正確に言えば、中国政府は「垂直下降ガバナンス」の基軸・発動源である。一方、「垂直上昇ガバナンス」の発動源は、未定型諸アクター（人々、団体、結社、メディア、国内企業）である。

水平ガバナンスは国際層レベル、国家層レベル、地方政府層レベル、地域コミュニティ層レベルから構成される。各々のレベル（層）において、政策や事業のベクトルが国内外から中国政府に向かう「向心ガバナンス」と、中国政府から国内外の



他の諸アクターに向かう「遠心ガバナンス」がある。

中国政府は「遠心ガバナンス」の基軸・発動源である。一方、政府外の未定型諸アクター（国際機関、諸外国、国際N G O組織、国外企業など）が発動源となるのが、「求心ガバナンス」（中国政府へと向かうガバナンスのベクトル）である。

理想値基準でいえば、「垂直上昇ガバナンス」と「水平求心ガバナンス」の必要性が強調されるであろう。しかし、現実値基準でいえば、「垂直下降ガバナンス」と「水平遠心ガバナンス」に、国内外においてどう折り合いをつけていくのが重要な論点となる。なお、ガバナンスという用語と絡めるならば、ここでいうところの現実値基準は「統治」であり、理想値基準は「協治」であると識別できる。

北京五輪をめぐるガバナンス・プロセスのあり方は「垂直下降ガバナンス」から「垂直上昇ガバナンス」へ、「水平遠心ガバナンス」から「水平求心ガバナンス」へ、換言すれば「統治」から協治へという「あるべき姿論」にすんなりと結論づけてよいのであろうか。

ここでガバナンス・プロセスとして大切なのは、垂直であれ水平であれ、「交錯ガバナンス」の領域を少しでも増やしていくことではないだろうか。下降と上昇、遠心と向心の各ベクトルが「交錯・連結・合成」していく方策こそが最優先して追求されるべきなのである。北京五輪後の中国におけるスポーツ政策はまさにこの「交錯・連結・合成」ガバナンスの確立に貢献するものでなければならぬし、国外諸アクターもその達成に向けた努力を惜しむべきではない。

る関係組織による大会成功に向けた貴重な取り組みにつつまして、真摯に学んでいきたいと考えております。

北京五輪大会はこれからの中華人民共和国のより一層の成長と発展をもたらす極めて重要な国家的大事業であり、世界中から注目を集めております。日本において公共政策研究に取り組む大学研究者として、今後、とくに研究面で貴国との交流にも貢献したいという思いも強く、ぜひ貴機関を訪問させていただきお話を伺いたく、どうかよろしくお願い申し上げます（2007年7月26日付）

<sup>2</sup> 英文表記は All-China Youth Federation (AVYF)。1949年に発足した各青年団体の連合組織である。2007年現在、52団体と青年7万7,000人の個人会員を持ち、その奉仕対象は3億人以上に及ぶ中国青年全員とされている。団体会員については、全国レベルの青年団体と各省、自治区、直轄市レベルの青年連合会により構成されている。活動の柱として「国際交流」「科学技術イノベーション」「香港・マカオ・台湾との交流」「環境保護」「青少年權益擁護」「新農村建設」「文化分野における青年事業」「モラル教育」「ボランティア活動」を掲げている。

<sup>3</sup> 日本人参加者は会社経営者、日本大使館職員、日本語教師など子どもを含む10名であった。

<sup>4</sup> 天津日本人会は天津在住の日本人が「会員相互の親睦と福祉の増進及び円滑な商工活動等の推進をもって日中友好親善と経済文化交流の発展に資することを目的とする」組織で、「天津日本人会だより」（毎月発行）を通じて、定例会・イベント・同好会情報を提供している。

<sup>5</sup> 当日受け取った国際医療部作成の日本語冊子によれば、中日友好病院は、日本のODAにより1984年10月に開院し、中国に2つある中国衛生部直轄総合病院の一つで、1,315床の病床数、救急部、外来（合計53の診療科）、臨床研究所、研修センターを持つ。「患者様へ」と題して、「この冊子は、中日友好病院の紹介と入院生活のご案内です。慣れない環境で療養生活を送られる患者様の参考になればと思い、作成しました」「文化や言語の違いで、誤解が生じることがあるかも知れませんが、私達はできるだけ患者様のご要望に答えるよう努力いたします。尚、当病棟には、日本語の話せる医師・看護師がいます。何かありましたら遠慮なくスタッフにお申しつけください」とある。

<sup>6</sup> リストアップした競技施設は、以下のとおりである（カッコ内は英語表記と競技種目）。○国家体育場 (National Stadium (NST))：陸上競技、サッカー)、○英奈遊泳館 (Ying Tung Natatorium (YTN))：水泳（水球）、近代五種（水泳）、○オリンピック体育館 (Olympic Sports Centre Gymnasium (OSG))：ハンドボール)、○オリンピック体育場 (Olympic Sports Centre Stadium (OSS))：サッカー、近代五種（ラン・馬術）、○国家遊泳中心 (National Aquatics Center (NAC))：水泳（競泳、飛込み、シンクロナイズドスイミング、水球）、○国家体育館 (National Indoor Stadium (NIS))：ハンドボール（決勝）、体操（体操、トランポリン）、○国家会双中心缶劉館 (Fencing Hall (CIEC))：フェンシング、近代五種）、○オリンピック森林公園射撃場 (Olympic Green Archery Field)：アーチェリー)、○オリンピック森林公園曲木毬球場 (Olympic Green Hockey Field)：ホッケー)、○オリンピック森林公園阿球場 (Olympic Green Tennis Centre)：テニス)(以

<sup>1</sup> 研究趣意書の内容は以下のとおりである。

「私は日本における国立大学である宇都宮大学国際学部におきまして、公共政策をめぐる研究に従事している者でございます。とくに国家や都市のスポーツ政策をめぐる研究に関心を持っており、このたび『北京五輪大会開催にかかわる管理運営をめぐる政策実施の動向』というテーマで調査研究を行うため、日本政府（文部科学省）の研究助成を得て、貴国を訪問させていただきました。

北京五輪大会開幕が1年後に迫った段階で、主要会場が集中する北京市において急速に展開されている五輪関連施設を対象とする都市開発の状況や、とくに北京五輪大会の準備に何らかの形で関わってい



上がオリンピック・グリーンエリア)。○中国農業大学体育館(China Agriculture University Gymnasium)、○北京科学技術大学体育館(Beijing Science and Technology University Gymnasium)、○北京航空航天大学体育館(Beihang University Gymnasium)、○北京大学体育館(Peking University Sports Hall)、○北京理工大学体育館(Beijing Institute of Technology Gymnasium)(以上が大学エリア)。○首都体育館(Capital Indoor Stadium (CAS))、○北京射撃場飛碩範場(Beijing Shooting Range CTF (BSF))、○北京射撃館(Beijing Shooting Range Hall (BSH))、○老山自行車館(Laoshan Velodrome (LSV))、○老山自行車場(Laoshan Mountain Bike Course (LSC))、○小勃廈牛場(B M X Field)、○五棵松体育館(Wukesong Indoor Stadium)、○五棵松棒球场(Wukesong Baseball Stadium)、○圭台望球場(Fengai Softball Field)(以上が市西部エリア)。○北京工業大学体育館(Beijing University of Technology Gymnasium (BTG))、○工人体育館(Workers' Indoor Arena (WIA))、○工人体育场(Workers' Stadium (WST))、○沙漠排球場(Beach Volleyball Ground)(以上が他エリア)。

<sup>7</sup>2007年11月10日と11日の2日間の日程で、北京郊外の中国政法大学昌平キャンパスにおいて開催された。テーマは「オリンピックにおける法律問題」であり、中国、韓国、日本から、法学・法律の研究者や実務者が一同に介して、翌年の北京五輪を見据えた研究発表や討議が展開された。なお、中村は学会2日目の11月11日に「北京オリンピック競技施設の建設・運営をめぐる法学研究への期待—ネットワーク・ガバナンスの社会的構築に向けて—」と題する研究発表を行った。

<sup>8</sup>2007年11月9日から11日までの開催。主催は中国残疾人連合会とWAFCA(NPO法人アジア車いす交流センター)。主管は中国パラリンピック委員会と中国残疾人奧林匹克運動管理中心。共催は中日新聞社、協賛は株式会社デンソー、あいおい損害保険株式会社。後援者には在中華人民共和国日本国大使館、国際交流基金、北京日本人会、日本障害者スポーツ協会、日本車椅子バスケットボール連盟が名を連ねている。

<sup>9</sup>拙稿「オリンピック期間中の北京に滞在して」(独立行政法人国際協力機構中華人民共和国事務所『JAICA中国事務所ニュース』(2008年8月号)、6-7頁)。

(本稿の執筆にあたっては文部科学省補助金基盤研究(C)の助成を得た)

# **Related Projects and Governance Process of the 2008 Beijing Olympic Games**

NAKAMURA Yuji

## **Abstract**

This paper is to clarify the characteristics of the various related projects of the 2008 Beijing Olympic Games. During living experience in Tianjin and Beijing City in the summer season (2007-2009), I interviewed with staff members of the Japan International Cooperation Agency China Office, the International Department All-China Youth Federation and Beijing Olympic sponsor business corporations etc. I also participated in the related projects of the 2008 Beijing Olympic Games, visited Olympic Game Stadiums and watched baseball and softball games.

Judging from the above experience and the past knowledge of related data on Beijing Olympic Games (press comments etc.), I came to a conclusion as follows:

Chinese government is in the centre of the governance process and especially is at the core of the “top-down style governance” and “centrifugal style governance”. There are not core actors in the “bottom-up style governance” nor are in the “centripetal governance”. There are only uncertain many actors in both these governance such as citizens, international organization, foreign governments and sponsor business corporations etc. It is important for us to recognize the possibility of creating the “mixture, connection and compound governance” toward the solution to political, economical, social, industrial cultural problems of China.

(2009 年 11 月 2 日受理)